

Richardson の *Pamela* における悪態語

— Fielding の *Shamela* と *Joseph Andrews* と比較して —

脇本 恭子

Throughout its long history, the English Language has produced a wide variety of terms applied to men and/or women, most of which are found in address forms in spoken language. Literary authors make an effective use of different terms as variation, whether abusive or endearing, to have their works reflect the colloquial language of their days. Eighteenth-century British literary works can be valuable materials for us to analyse these linguistic features. The present article aims at examining the terms of abuse in Richardson *Pamela* (1740) from a historical perspective. A comparative discussion is made, where necessary, on two contemporary literary works from the same perspective, in the hope of sketching out the semantic history of each term and exploring one phase of colloquialism in those days.

Keywords : 悪態語 ; 呼称 ; 18世紀 ; *Pamela* ; *Pamela* のパロディ

はじめに

人を表す言葉は、対象となる人物の職業、立場、年齢や性別など社会的な要因によって異なるだけでなく、相手との関係や心理的距離など感情的な要因によっても大いに変わるものである。英語の場合、この後者の要因による呼称表現がとりわけ豊かで、特に18世紀中葉から後半にかけての劇・小説には、その傾向が顕著に現れている。例えば、以下の三つの引用を見てみよう。¹

(1a) If I have been a Sauce-box, and a Bold-face, and a Pert, and a Creature, as he calls me, have I not had Reason? (*Pamela* I. 44)

(1b) Hussy, Gipsie, Hypocrite, Saucebox, Boldface, get out of my Sight, or I will lend you such a Kick in the --- (*Shamela* 339)

(1c) This the Terms *strange Persons*, *People one does not know*, the *Creature*, *Wretches*, *Beasts*,

Brutes, and many other Appellations evidently demonstrate; which Mrs. *Slipslop*, having often heard her Mistress use, thought she had also a Right to use in her turn: (*Joseph Andrews* 141)

(1a) は Richardson の *Pamela* (1740) から、(1b) は、そのパロディである Fielding の *Shamela* (1741) からの抜粋である。(1b) では、パロディの性質上、多少誇張めいた畳みかけになっているとはいえ、オリジナルの特徴を捉えたが故の言い回しとなっている。また、(1c) も、同じ作者による痛烈な風刺の箇所であるが、上流の人々の（ここでは傲慢な令夫人の）、一般大衆に向けられる蔑称が並べ立てられている。キリスト教信者として 'brethren'（同胞）と見るべき者に対して、身分が低いというだけの理由で、同じ人間とは思えないような差別的な呼び方をすることへの批判の刃が、軽妙な皮肉の下に隠されている。

本論考では、Richardson の *Pamela* (以下 *Pam*)、及び、Fielding による *Pam* のパロディ二作—

Shamela (1741, 以下 *Sham*) と *Joseph Andrews* (1742, 以下 *JA*) を資料として、人を表す言葉、とりわけ悪態の呼称表現について吟味・考察する。² 各作品に見られる特徴的な悪態語を明らかにすると共に、*Oxford English Dictionary* (以下 *OED*) や *Wright* の *English Dialect Dictionary* (以下 *EDD*), *Partridge* の *A Dictionary of Slang and Unconventional English* (以下, *DSUE*) を用い、折に触れては、18世紀に編纂された *Johnson* の *A Dictionary of the English Language* (1755, 以下 *Johnson*) を参照して、それぞれの語句の意味的変遷を、歴史的発達の過程から辿っていく。

1. 性別に拠らない悪態語

1.1 'Bold-Face,' 'Fat-Face,' 'Baby-Face'

Pam は、女中の身分でありながら、主人の Mr. B による度重なる誘惑の攻撃から身をかわず話であるので、Mr. B から Pamela に投げかけられる悪態語には、主人に楯突く「生意気」な言動を非難するものが多い。このことは、*Pam* の辛辣なるパロディである *Sham* にも同様に当てはまる。まずは、'Bold-face' で呼びかけている例から始めたい。

(2a) Very well, Bold-face, said he, and Equivocator again! (*Pam* I. 29)

(2b) Why, Bold-face, said she, you'll forget your Distance, and bring me to your Level before my Time. (*Pam* II. 198)

(2c) . . . it would be very presumptuous in me to rely upon my own Strength, against a Gentleman of his Qualifications and Estate, and who is my *Master*; and thinks himself intitled to call me Bold-face, and what not? only for standing on my necessary Defence: (*Pam* I. 46)

(2d) I wish I had never seen your bold Face, saucy Sow, and so went out of the Room. (*Sham* 331)

“as bold as brass” という強意直喩があるように、'bold' は不遜な態度を形容する典型的な語である。(2d) の引用から推測できるように、“One who has a bold face” は “an impudent person” のことを指す。*OED* によると、'bold-face' という複合名詞の初例は1692年であるが、³ 分詞形容詞の 'bold-faced' の方の初例が時代的に古く、1591年の Shakespeare からで、ちょうど100年前に遡る。¹

初期近代英語（以降 EModE: Early Modern English）の時代に発達したと思われるが、現代英語では、この 'bold-face' という複合名詞は、通常、印刷用語の「ボールド体；太字」であって、「図々しい（厚かましい）人、生意気な奴」という意味では、使用されていない可能性が高い。実際、研究社の『新英和大辞典』や『リーダーズ英和辞典』、大修館の『ジーニアス英和大辞典』、小学館の『ランダムハウス英和大辞典』、岩波書店の『岩波英和大辞典』など、代表的な英和辞典に収録されていない。ちなみに、この語は、「(面の皮が厚いことから) 恥知らずで厚かましい人」を表す日本語の「厚顔」という発想と同類のものであろう。

他にも、*Pam* の中に現れる 'face' から成る複合語には、'fat-face' がある。*OED* に “a term of abuse” と記載されているように悪態語であり、以下の (3) の引用が *OED* の用例となっている。⁵ 外見から連想される蔑称で、他の箇所にも同じ人物に言及して、“And where dost thou lay thy pursy Sides?” (*Pam* II. 242) という表現が出てくる。

(3) I doubt it not, good Woman, said she, and lies with him too, does she not? Answer me, Fat-face!— (*Pam* II. 203)

「顔」からの繋がりであれば、上述の 'bold-face,' 'fat-face' や次の 1. 2 で扱う 'saucy-face' に並んで、'baby-face' も *Pam* の中では蔑称として用いられている。通常 'baby-face' に悪い含みはなく、単に “(a person with) a babyish face” という「童顔の人」を指すが、⁶ 以下の例文 (4) では、比喩的な 'dirt' (“Applied abusively to persons.”⁷) や後の 1. 4 で考察する 'beggar's brat' などのような口汚い罵り語と並記されていることから判るように、一種の悪態語となっている。ここでは、外見は幼子のような汚れない様であっても、中身は未熟な世間知らずということ（「無垢⇒無知」）が強調されていると考えられる。

(4) She call'd me *Painted Dirt*, Baby-face, *Waiting-maid*, *Beggar's Brat*, and *Beggar-born*. (*Pam* II. 236)

1.2 'Sauce-Box,' 'Saucy-Face'

上記の (2d) に出てくる “saucy Sow” や次に続くセクションの例文 (7) の “Saucy Chops” の 'saucy' は、「生意気な、こしゃくな」という形容詞であるが、この名詞形の 'sauce' が構成する複合語の

‘saucebox’も、「生意気」な者に向ける表現として、本論考の資料である三作品全てに出てくる。OEDには“A person addicted to making saucy or impertinent remarks.”と定義されているが、⁸Johnsonには、“An impertinent or petulant fellow.”と「男性」に限られている。⁹以下にいくつか例を挙げておくが、(5a)はOEDの用例となっている。(5e)のように姉弟間の口論や、(5f)のように、からかい半分に親愛の情を示すためにも用いられている。

(5a) And so I am to be exposed, am I, said he, in my own House, and out of my House, to the whole World, by such a Saucebox as you?

(Pam I. 29-30)

(5b) Why, Sauce-box, says he, did not my good Mother desire me to take care of you?

(Pam I. 73)

(5c) This, I suppose, makes me such a Sauce-box, and Bold-face, and a Creature; and all because I won't be a Sauce-box and Bold-face indeed.

(Pam I. 90)

(5d) . . . but when I came to the End of the Room, I stood still, and my Master cryed out, Hussy, Slut, Saucebox, Boldface, come hither--- (Sham 329)

(5e) ‘Is she so, Saucebox?’ says the Sister, giving him a Box on the Ear, which the Father would probably have resented, had not *Joseph*, *Fanny*, and the Pedlar, at that Instant, returned together.---

(JA 291)

(5f) It can't be worse, said he, my dear Sauce-box, than I have seen already; and I will allow your treating me in ever so black a manner, on that Occasion, because it must have a very black Appearance to you.---

(Pam II. 49)

この‘saucebox’に関して、EDDには、主にLincolnshireの地方方言である“(a) the mouth”と、England広域に亘る方言である“(b) an impudent, saucy person, a pert child”という二つの意味が表示されている。¹⁰‘box’という語については、OEDにもEDDやJohnsonにも特に言及されていないが、この語は、生意気な「口」を叩くことから、その口の主である「人」を指すよう、堤(代)喩(synec-

doche)的に拡張したのではないだろうか。‘sauce’は、それ自体が呼格として、“*Vocatively*. An impudent person, a ‘saucebox’.”で用いられていたが、今では廃語である(初例：a1553)。¹¹一方、‘saucebox’の方は現代英語にも残っており、OEDの最終例は1969年である(初例：1588)。

ちなみに、俗語を歴史的観点から考察し、*Slang through the Ages* (1997)を著したGreenは、OED同様、‘saucebox’を名詞の‘sauce’からの派生としているが(127)、Johnsonには、“from *sauce*, or rather from *saucy*”というように、形容詞の方に由来すると見ている。‘saucebox’と同じ意味の‘saucy-box’という複合名詞もある。また、この‘saucy’を使った別の複合語には、‘saucebox’と同じく“an impertinent person”を表す‘saucy-face’もあり、以下のPamからの一文が、OEDの引用例となっている。¹²

(6) Come, Saucy-face, give me another Glass of Wine!

(I. Pam 252)

1.3 ‘Chops’

さて、例文(7)の中で、前述の‘Boldface’と並ぶ“Saucy Chops”であるが、この‘chops’は、元々‘jaw’を意味する‘chap’の異形である。通常複数形で使用され、“The jaws and intervening space, the cavity of the mouth, fauces, parts about the mouth;”のことを指す。¹³PartridgeのDSUEには“The mouth: C. 18 coll.”と記載され、18世紀に口語的であったことが分かる。¹⁴その含みとしては、OEDに“This is the more usual form in contemptuous or humorous application to men”¹⁵と記され、Johnsonにも“The mouth of a man, used in contempt.”¹⁶と出ているように、侮蔑的である。

(7) No, forsooth, says I, as pertly as I could; why how now Saucy Chops, Boldface, says he---Mighty pretty Words, says I, pert again.---

(Sham 328)

さらにOEDには、人そのものを指す“An appellation for a person with fat or bloated cheeks.”¹⁷も加えられているが、この内容はShamelaの外見とは異なるので、上記の(7)の例では、所謂「減らず口」のような、あくまで生意気さを強調した言い方と思われる。WrightのEDDにも、England全般に亘る方言もしくは俗語で、“also used *fig.* impudence, ‘cheek.’”と記載されている。¹⁸

顎(もしくは口部)や頬が「生意気」のイメージに繋がるのか、上記のEDDに‘chop’の同義語とし

て挙げられている ‘cheek’ も、古英語 (以降, OE: Old English) の時代に “The jaw, jaw-bone; later called ‘cheek-bone’” で、OEの後期から中英語 (以降, ME: Middle English) の時代にかけて “chaps, chops, or fauces” であったのが、19世紀には “Insolence in speaking to any one”¹⁹ を意味するようになっていいる。同様に、 “Characterized by ‘cheek’” から派生した形容詞形の ‘cheeky’ も、 “insolent or audacious in address; coolly impudent or presuming.” を表し、²⁰ 現代も口語で頻用されている。

1.4 ‘Beggar’s Brat’

‘brat’ の語源に関して、方言辞典である *EDD* には明確に示されておらず、*OED* にも “Of uncertain origin”²¹ となっているので、出所となった語が不明である。但し、*Johnson* が “Its etymology is uncertain; *bratt*, in Saxon, signifies a blanket; from which, perhaps, the modern signification may have come.”²² と注釈を付け、*OED* も “Wedgwood, E. Müller, and Skeat think it the same word as the prec. [= ‘brat,’ n.]” と付記しているように、語源が定かではないとしながらも、それぞれアングロ・サクソン (OE) の ‘bratt’ に言及している。

このOE起源の ‘brat’ の意味には、方言として “A child’s pinafore,” 軽蔑的には “A rag” で残っており、また、現代では廃語であるが、 “Rubbish, beggarly stuff.” (唯一例: 1656) という意味もあった。²³ 一方、蔑称の ‘brat’ について、*EDD* は “A child, *gen.* used as a term of contempt or disparagement.” と記載している。²⁴ *OED* の方は、 “A child, so called in contempt” という *Johnson* からの定義を踏また上で、 “In 16th and 17th c. sometimes used without contempt, though nearly always implying insignificance;” (初例: c1505) と加えている。²⁵ この二つの ‘brat’ の繋がりについて、*OED* は “evidence of the transition of sense has not been found.” としているが、軽蔑的な含みを持つという点を筆頭に、両者の間に共通点は多い。

以下の (8b) のように、罵詈雑言と言うほど口汚くはなくとも、多かれ少なかれ侮蔑的であることは確かである (日本語では、「ガキ; ちび」といった程度であろう)。 *OED* には、さらに “the phrase *beggar’s brat* has been common from the first.” と記されているが、*Pam* の中でも (8c), (8d) のように句の形で用いられている。

(8a) And that would bring down upon me an hundred *saucy Things*, and *low-born Brats*, and I

can’t tell what! (Pam II. 31)

(8b) . . . and as she approached it, told them, if they pleased she would divert them with one of the most ridiculous Sights they had ever seen, which was an old foolish Parson, who, she said laughing, kept a Wife and six Brats on a Salary of about twenty Pounds a Year; adding, that there was not such another ragged Family in the Parish. (JA 280)

(8c) She call me *Painted Dirt*, *Baby-face*, *Waiting-maid*, *Beggar’s Brat*, and *Beggar-born*. (Pam II. 236)

(8d) So take care, *Pamela*; take care, beggarly Brat; take care. (Pam II. 215)

ちなみに、‘brat’ と同類ではあるが、通常は中立である ‘child’ も、軽蔑的な含みを持つ呼称となることがある。*OED* に “In contemptuous or affectionate address.”²⁶ と記載されているように、文脈次第では悪態語にも親愛語にもなる。

(9) Then, said she, very mannerly, Thou lyeest, Child, that’s all; and I give thee up! (Pam II. 199)

1.5 ‘Simpleton’

日本語の場合同様、悪態をつく際、その攻撃・嘲笑の素となるのは ‘fool,’ ‘idiot’ など「愚かさ」に繋がるものが多い。*Pam* の ‘Mr. B’ に至っては、*Sham* の中では ‘Mr. Booby,’ ‘Squire Booby’ などと名付けられ、露骨な風刺となっている。 ‘fool’ や ‘idiot’ には、 “precious Fools” (*Sham* 328) とか “romantick Idiot” (*Pam* I. 220) のような修飾語も付くことがあり、独特なコロケーションで滑稽な言い回しとなっている。

さて、この ‘fool’ と同意語である ‘simpleton’ は、「無邪気な⇒無知な」を表す形容詞 ‘simple’ に、「... なる人 (もの)」を表す接尾辞の ‘-ton’ (i.e. one) が添加した形であるが、*OED* には、その語形成について、 “A fanciful formation on SIMPLE a.” と記載されている。²⁷ 同類の語形成には、「一人っ子; 独身者」を意味する ‘singleton’ や、方言として *EDD* に記載されている ‘idleton’²⁸ などがある。*OED* は、さらに *Johnson* を引き合いに出し、 “Characterized by *Johnson* (1755) as ‘a low word’” という注釈を付けている (*Johnson* の定義では、 “A silly mortal; a tri-

fler; a foolish fellow.”²⁹⁾。EDDには‘obs.’と記されており、現代英語では、Devonshireのような一地方の方言以外では、廢語になりつつある。³⁰⁾

(10a) But wise Men in Love, are always the greatest Simpletons!— (Pam II. 213)

(10b) How could you imagine I should be such a Simpleton, as to upbraid thee with being thy Mother’s own Daughter! (Sham 328)

(10c) Sir, said I, I value my Vartue more than all the World, and I had rather be the poorest Man’s Wife, than the richest Man’s Whore. You are a Simpleton, said he; (Sham 341)

1.6 ‘Put/Putt’

「愚かさ」を愚弄するのに用いられている語の中で、次にここで挙げておきたいのが‘put’である。この語は‘putt’とも綴られ、OEDによると、17世紀に俗語として“A stupid man, silly fellow, block-head, ‘duffer’”のことを指し、さらに‘country put’の句では“a lout, a bumpkin”という意味で使われるようになったとのことである。³¹⁾ 但し語源については、“origin unascertained”と記されているように定かではなく、Johnsonにも“from the verb”のみで、明記されていない。意味的としては、Johnsonには“A rustic; a clown”という「野暮な田舎者」(‘country put’) で記載されている。³²⁾ Green (1997: 2)にも、“Put had meant a rustic in the 17C (especially as a country put)”と出ており、17世紀には、「愚か者」というよりも「田舎者」という意味の方が優勢であった可能性が高い。

他方、英国の方言辞典であるEDDには、概括して“A term of contempt for any one”と定義されている。SuffolkとDevonshireの俗語であると共に、アメリカ方言と記されている。³⁴⁾ 辞書によって若干ニュアンスが異なるが、俗語辞典であるPartridgeのDSUEには、GroseのDictionary of the Vulgar Tongueを参照して、‘put’を‘country put’の“a frequent variant”で、“A rustic; a dolt”と定義している。1750年頃までは俗語、1830年頃までは口語で用いられ、それから標準英語となり、現代では古語である。DSUEにはさらに、“The discrimination of put, a blockhead, and country put, a bumpkin, is logical: but the distinction cannot be pressed.”と解説されており、「愚か者」と「田舎者」の間を明確に線引きすることは難しいようである。³⁴⁾

‘put’が卑俗な部類の語であるためか、Pamには使用されていない。以下には、ShamとJAからの例をそれぞれ挙げておく。

(11a) For Parson Williams hath promised to visit me when he comes to Town, and I have got a good many fine Cloaths of the Old Put my Mistress’s, who died a wil ago; (Sham 325)

(11b) One of the Servants whispered *Joseph* to take him at his Word, and suffer the old Put to walk if he would: This Proposal was answered with an angry Look and a peremptory Refusal by *Joseph*, who catching *Fanny* up in his Arms, aver’d he would rather carry her home in that manner, than take away Mr. Adams’s Horse, and permit him to walk on foot. (JA 243)

本稿で使用しているD. Brooks-Davies編のSham, JAのテキストでは、(11a)の‘put’についてはOEDからの定義を、(11b)についてはJohnsonからの定義を参照している。(11a)では、故人となった女主人のことを、(11b)ではAdams牧師のことを指しており、性別には拠らないようである。上記の二例からも察せられるが、‘put’を修飾する形容詞は‘old’が最も多く、他にも、EDDの例文には、“He could not avoid drinking his old ‘puts’ [his wife’s] health, *Raby Rattler* (1845) xxxv.”や“A hard old put, *Dial. Notes* (1896) I. 380. [Amer.]”がある。

2. 女性を対象とする悪態語

2.1 ‘Hussy’

女性に対する悪態語でPam, Shamに頻用されているものの一つに、‘housewife’に由来する‘hussy’がある。OEの時代、‘house’は‘hūs’ [hu:s], ‘wife’ (woman)は‘wīf’ [wi:f]であった。‘hussy’は、‘housewife’ (‘hūswīf’)の長母音の/u:/が短音化され/ʌ/となり、また子音の/w/音と/f/音が脱落した結果生まれた形で、[hʌzi]と発音される(従って、‘huzzi’という異形もある)。OEDにも“A phonetic reduction of HOUSEWIFE”³⁵⁾と記載されており、Johnsonには“corrupted from housewife”³⁶⁾と出ている。/u:/⇒/ʌ/の変化は、ちょうど‘hūs’+‘bonda’ (= ‘hūsbonda’)に由来する‘husband’と同じである。また、日本語の場合と同様、/w/音は脱落しやすく(e.g. Keswick /kezɪk/, Warwick /wɒrɪk/), ‘hussy’のみならず、‘housewife’自体の異形にも、18世紀には‘hussive,’ 19世紀には‘huzzif,’ ‘hussif’などがあり、

発音の推移の跡が窺い知れるところである。³⁷

意味の変遷を辿ってみると、語源の ‘housewife’ と同じ ① “The mistress of a household;” (*OED* の用例：1530-1800, *obs.*) から、② “A rustic, rude, opprobrious, or playfully rude mode of addressing a woman.” (*OED* の用例：1650-1853) という悪い含みを持つようになり、³⁸ *Johnson* が “taken in an ill sense” と解説するところの「意味の悪化」を受けたと言える。18世紀という一時代に限定すると、*Johnson* では “A sorry or bad woman; a worthless wench.” (“It is often used ludicrously in slight disapprobation.” が付記) という定義しか記載されていないので、³⁹ この時代には、‘housewife’ の意味では、少なくとも標準英語の中ではほぼ消滅したのではないかと推測される。

しかしながら、*EDD* には、“A term of contempt or reproach for a woman or girl; a woman of bad character” という侮蔑的な意味合いだけでなく、“A housewife; a woman of any age, but *gen.* applied to a young girl, a ‘lass,’ wench.” という中立の意味においても、18、19世紀からの例が多数引用されているので、地方方言にはかなり残っていたものと思われる。⁴⁰ 但し、それも、「一家の主婦」というよりも、後半部の定義である「女性」一般のことを指す場合が多く、‘woman,’ 特に ‘lass’ の代用語である。‘lass’ に取って代わるものなので、概して若い女性が対象となるが、1886年の引用例 “When a man o’ forty tak’s up wi’ an auld hizzy o’ sixty” (“When a man of forty takes up with an old hussy of sixty”) が示すように、実際には幅広い年代層に用いられた模様である。

OED も③ “a mere equivalent of woman, lass” (用例：1647-1889) の意味を挙げており、文脈によっては特段悪い含みもないこともあるようである。但し、*OED* には、“A strong country woman, a female of the lower orders; a woman of low or improper behaviour, or of light or worthless character; an ill-behaved, pert, or mischievous girl; a jade, minx.” が付記されており、通常は、身分の低い女性や品行方正ではない女性に対して用いられる語である。また、“Also jocularly or in raillery.” と追加されているように、冗談めかしに呼び掛ける場合にも用いられる。⁴¹ これが現代口語英語に発達した模様で、*Partridge* の *DSUE* には、“When, in C. 19-20, used jocularly as = woman, lass, esp. as a term of address, verges on coll.”⁴² と記されている。

Pam には上記の②、③両方の意味で使用されているが、②の頻度が圧倒している。以下には、*Pam*、*Sham* からいくつか例を挙げておく。(12f) は、身分

の上がった Pamela が、その身分にふさわしい衣装に着替えた後、自らの姿を鏡に映して見定める場面である。この一文は、*OED* の③の定義の用例となっている。

(12a) What a foolish Hussy you are! (*Pam* I. 19)

(12b) Said my Master, with an imperious Tone,
Get out of my Presence, Hussy! I can’t bear you in
my Sight. (*Pam* I. 96)

(12c) Come hither, Hussy! said he; you and I have
a dreadful Reckoning to make. (*Pam* I. 253)

(12d) Hussy, Gipsie, Hypocrite, Saucebox,
Boldface, get out of my Sight, or I will lend you
such a Kick in the -- (*Sham* 339)

(12e) . . . and my Master cryed out, Hussy, Slut,
Saucebox, Boldface, come hither-- (*Sham* 329)

(12f) . . . and taking my Fan in my Hand, I, like a
little proud Hussy, look’d in the Glass, and
thought myself a Gentlewoman once more;
(*Pam* II. 85)

この ‘hussy’ に関して、*Womanwords* (1989) を著した Mills は、“Although it retained its earlier connotations of sauciness, by the late C19th the degeneration of *hussy* reached its nadir: it denoted a lewd, or brazen woman, a prostitute or jade.” (122-23) と指摘し、‘hussy’ がこの上なく悪い意味合いの語と化したことも理解される。

2.2 ‘Slut’

Johnson は ‘slut’ の語源を Dutch の ‘*slodde*’ としているが、⁴³ *OED* は北欧諸語に音や意味上の類似を認めながらも、結局 “connexion is very doubtful” と下し、その由来が不明である。ME 後期に、“A woman of dirty, slovenly, or untidy habits or appearance; a foul slattern.” (*OED* の初例：1402), “A woman of a low or loose character; a bold or impudent girl; a hussy, jade.” (*OED* の初例：c1450) の意味で使われ始めた。但し、以下の (13e) の例が示すように、“In playful use, or without serious imputation of bad qualities.” (*OED* の初例：1664) という意味にも拡張しており、⁴⁴ この点は、前セクションの ‘hussy’ の場合と同様である。ちなみに、(13e) では、

正規の結婚を前に幸福の絶頂にある Pamela が、父親に宛てた手紙の中で、自らをからかい半分に “the little vain Slut” と称している。

(13a) He was angry, and said, Who would have you otherwise, you foolish Slut! (*Pam* I. 19)

(13b) Artful Slut! said he; What's this to my Question? (*Pam* I. 321)

(13c) He swore that *Pamela* was an ugly Slut, (pardon, dear Madam, the Coarseness of the Expression) compared to such divine Excellence. (*Sham* 332)

(13d) “Touch one, if you dare, you Slut,” said Mrs. *Tow-woose*, . . . (*JA* 49)

(13e) Will you forgive the little vain Slut your Daughter, if I tell you all, as he was pleased to tell me? (*Pam* II. 58)

一方、元から好ましくない意味合いであったという点では、‘slut’ は ‘hussy’ とは性質を全く異にしている。上記の *OED* の ‘slut’ の定義の中に、‘slovenly,’ ‘slatern’ という語が含まれているが、この /sl/ という音の響きについて、Crystal (1988) は、‘Sound Symbolism’ という章の中で、“Words beginning with *sl* are said to convey unpleasant or negative association” (122) という見解を述べ、それを検証するのに ‘Sl- word’ のリストを作成している。そのリストの中にこの ‘slut’ も含まれているが、他には、‘slack,’ ‘slag,’ ‘slatern,’ ‘slaughter,’ ‘slave,’ ‘slay,’ ‘sleazy,’ ‘slob,’ ‘slop,’ ‘slug,’ ‘sluggish,’ ‘slum,’ ‘sly’ などが挙げられている。概して「活力のない」ものや「自堕落な」イメージの語彙が多い。例えば、‘slag’ は「ふしだら女；売女」を、‘slatern’ は「だらしない女；売春婦」のことを指し、まさに ‘slut’ と同類である。

この ‘slut’ の頻度は比較的高く、語数の少ない *Sham* では 2 回とはいえ、*Pam* では 11 回、*JA* では 12 回である。(13a) の “you foolish Slut,” (13b) の “Artful Slut” や (13c) の “an ugly Slut” 以外にも、“such idle Sluts” (*Pam* I. 54), “this little Slut” (*Pam* I. 55), “this saucy Slut” (*Pam* I. 73), “this intriguing little Slut” (*Pam* I. 253), “such a Vagabond Slut” (*JA* 291), “wicked Sluts” (*JA* 34), “these forward Sluts” (*JA* 91), “the dirty Slut” (*JA* 255), “such an ugly Slut”

(*JA* 255) など、ネガティブな修飾語を伴っていることが多い。現代英語にも根強く残っており、Mills (1989: 224) は、“In the C20th in the UK, *slut* has come to be a widespread term of abuse, synonymous with *scrubber* and *slag*, applied to any woman who does not accept the sexual double standards of society.” と解説している。英米を問わず広く通用している語の一つである。

2.3 ‘Drab,’ ‘Dowdy’

さて、上述の ‘slut’ や ‘slatern’ と同意語であるのが、“A dirty and untidy woman; a slut, slattern.” (*OED* の初例：c1515) という意味の ‘drab’ である。この意味は、時経たぬうちにさらに悪化し、“A harlot, prostitute, strumpet.” (*OED* の初例：c1530) を表すようになった。⁴⁵ *Johnson* にも “A whore; a strumpet,”⁴⁶ *Partridge* の *DSUE* にも “a whore, slattern”⁴⁷ と記載されている。

OED の初例が示すように、16 世紀前半、即ち EModE の時代に、一種の隠語 (“a low or cant word”) として現れた模様である。*OED* は、“dirty female, slattern” を意味する Irish の ‘drabog’ やゲール語 (Gaelic) の ‘drabag’ などケルト語派との繋がりを掲げると共に、“Connexion with LG. *drabbe* dirt, mire, has also been suggested.” を加え、低地ドイツ語 (Low German) との関連性にも言及している。他方、*Johnson* は、この語を ‘lees’ を意味する OE の ‘drabbe’ に由来すると見ている。

また、Mills (1989: 70) は、“In its sense of dull, *drab* derives from the hempen, linen or woollen cloth of natural undye colour which was known as drab or drap.” と述べ、「布地」の方の ‘drab’ にも触れている。しかしながら、(色そのものを表す “Of a dull light-brown or yellowish-brown.” という意味の *OED* の初例は 1686 年であるものの) 比喩的な用法である “Dull; wanting brightness or colour.” という形容詞の初例は 1880 年であり、“A dull or lifeless appearance or character.” という名詞に至っては、初例が 1903 年で、今回資料とする三作品の時代からはかなりずれている。⁴⁸ 以下には、*JA* からの例を挙げておく。

(14) ‘---Pray, what sort of Dowdy is it, Mr. Scout?’---‘The ugliest Creature almost I ever beheld; a poor dirty Drab, your Ladyship never saw such a Wretch.’ (*JA* 254)

(14) の例文中の ‘dowdy’ は、‘dowd’ に指小辞

(diminutive) の ‘y’ が付けられた形である (e.g. ‘dad’ ⇒ ‘daddy’)。基となっている ‘dowd’ の語源は明らかにされていないが,⁴⁹ 意味的には, “A woman or girl shabbily or unattractively dressed, without smartness or brightness.” (「みすぼらしい身なりの女性」) である。⁵⁰ *EDD* も “An ill-dressed, slatternly woman; a frump, awkward person” という意味を挙げているが, その他にも, “An old woman” を加えている。⁵¹

‘dowd’ との関係について, Mills (1989: 69) は, “By the C17th *dowdy* had replaced *dowd* and was a derogatory term for a badly dressed woman.” と説明している。ちなみに, *Johnson* にも “an awkward, ill-dressed, inelegant woman.” という定義のみで, 語源は明記されていない。⁵² 上述の Mills が “By the beginning of the C19th *dowdy* had pejorated;” (*ibid.*) と指摘しているように, 歴史的意味変遷の過程で悪化したものと思われる。D. Brooks-Davies 編の *JA* のテキストにも, Grose を参照して, ‘dowdy’ については “a coarse vulgar looking woman” というように, また, ‘drab’ については “a nasty sluttish whore” と注が付けられている。

2.4 ‘Trollop’

この ‘trollop’ も, EModE 期に “An untidy or slovenly woman; a slattern, slut; also, sometimes a morally loose woman, a trull.” (*OED* の初例: 1615) という意味で発生し, 上述の ‘slut’ や ‘drab’ と同類の語である。⁵³ *Johnson* には “A slatternly, loose woman.” と示され, “A low word, I know not whence derived.” という注釈が付いている。⁵⁴ *EDD* では, “A dirty, idle, slovenly person; *gen.* used of a female; a slattern.” と出ている。⁵⁵ この語は *Pam* や *Sham* には出てこないが, *JA* での頻度は 6 回で, 以下の (15a) は *OED* の用例となっている。

(15a) . . . but they shall not stay in it; that impudent Trollop, who is with Child by you, is discharged by this time.’ (JA 34)

(15b) . . . but I’ll maul the Slut, I’ll tear her nasty Eyes out; was ever such a pitiful Dog, to take up with such a mean Trollop? (JA 73-74)

(15c) Adams then snapped his Fingers, and cry’d, he thought she was some such Trollop. (JA 110)

OED は, 動詞 ‘troll’ との関連について触れている

が, さらに, Mills (1989: 241) は, 古期フランス語 (以下, OF: Old French) の ‘hunting term’ の一つである ‘troller’ (“to quest or to go in quest of game without purpose”) から, 14 世紀に ‘troll’ (“to move or walk about, to ramble, saunter or stroll”) として英語に入り, 16 世紀までに “draw on” とか “to entice or allure” といった比喩的な意味に発展したのではないかと見ている。「流し釣りをする」「ぶらつく, 散策する」というイメージから「餌でおびき寄せる」「(獲物を) 求めて探し回る」ことへ繋がったと思われる。この語は, 20 世紀に再び「相手を求めてうろつく, さまよい歩く」という意味の俗語として現れ, Mills も “In the 1960s *troll* re-emerged as homosexual slang meaning to walk the streets or cruise in search of a sexual encounter” (*ibid.*) との説明を加えている。これに対して, 俗語辞典の *DSUE* には, “A woman, respectable, or otherwise: Oxford University and underworld coll.: from ca. 1923” と出ている。⁵⁶

2.5 ‘Baggage’

以下に例示したように, 女性への蔑称として使用されていた ‘baggage’ であるが, その源を辿れば, OF の ‘*bagage*’ に由来し, ‘property packed up for carriage’ という「手荷物」と同じ語源である (この意味での *OED* の初例は c1430)。⁵⁷ *Johnson* にも “from *bag, bagage, Fr.*” と記されている。⁵⁸

(16a) Well, Mrs. Jervis, you abound with your Epithets! but I take her to be an artful young Baggage; (Pam I. 26)

(16b) Well, said he, you are an ungrateful Baggage; (Pam I. 87)

(16c) . . . and he bid me get out out of the Room for a saucy Baggage, and said he had a good mind to spit in my Face. (Sham 340)

cf. I’ll call Robin to take your Portmanteau: Bag and Baggage! said she, I’m glad you are going. (Pam II. 2)

女性を表す言葉としては, 大きくは, “A worthless good-for nothing woman; a woman of disreputable or immoral life, a strumpet.” (*OED* の初例: 1596) という罵りの意味 (「あばずれ; 淫売」) と, “Used familiarly or playfully of any young woman,

especially in conjunction with *artful, cunning, sly, pert, saucy, silly, etc.*” (初例：1672) というからかい程度に用いるもの（「小娘；生意気娘」）の二つに分かれる。⁵⁹ EDDにも同様に，“A term of reproach and depreciation applied chiefly to women or children.”と“Used familiarly, playfully, or endearingly of a young woman or a child”が記載されている。⁶⁰

何故本来「手荷物」という意味の語が、「あばずれ」などという女性に対する罵り言葉になったのか興味深いところであるが、Johnsonには“A worthless woman; in French *bagaste*; so called, because such women follow camps.”という注釈が付いている。⁶¹ この点について、詳細な解説を施しているのが Mills (1989: 17) で、“In the C17th the sense of an army’s portable property combined with that of a morally disreputable woman, causing the word to be used to denote a camp follower—in other words a prostitute who travelled with the army.”と述べている。ちなみに、以下のOEDの17世紀からの用例には、この意味が明確に現れている。

(16d) Every common soldiior carrying with him his she-baggage.

(1601 R. JOHNSON *Kingd. & Commw.* 81)

(16e) A baggage, or Souldier’s Punk, *Scortum Castrense*.

(1693 W. ROBERTSON *Phraseol. Gen.* 197)⁶²

さらに、OEDに記載されている‘baggage’の比喩的な意味を考えても（OEDの用例の年号をそれぞれ併記），“Encumbrances, burdensome matters.” (1607, 1757, *obs.*), “Rubbish, refuse, dirt.” (1549, 1576, 1587, 1645, 1661, *obs.*), “Purulent or corrupt matter, pus.” (1576, 1610, *obs.*), “A trifle, a trashy article.” (1579, *obs.*), “Spoken or written trash, rubbish, ‘rot.’” (1538, 1545, 1579, *obs.*), “Dregs, offscouring, riff-raff.” (1603, *obs.*), “Contemptuously applied after the Reformation to the rites and accessories of Roman Catholic worship.” (1549, 1566, 1566, 1579, 1587, *obs.*) など、「価値のないもの」ばかりである。さらに、この「価値のないもの」の比喩は、当初は女性に限らず、“A worthless or vile fellow” (1594, 1601, *obs.*) と、男性に対しても用いられていた。⁶³

上記の括弧内に示した用例の分布は、概して16世紀中葉から17世紀初頭にかけて集中している。女性に対する蔑称としての初例は、Shakespeareの*Taming of the Shrew* (1596) からであるが、他の用

例は、1601, 1611, 1693, 1712, 1850, 1851年など、17世紀前半から19世紀に亘っている。からかい程度に使われる‘baggage’の用例の方はそれより若干遅く、1672, 1687, 1715, 1766, 1822年というように、17世紀後半から19世紀にかけてであり、意味の推移が推し量られる。この推移に関連して、Partridgeの*DSUE*には、“Rubbish, nonsense: C. 16.”, “A worthless man: C. 16-17.”, “A harlot or a loose woman: coll. by 1660; † by 1800”と出ており、さらに、（多少古風とはいえ現代口語英語の意味でもある）“A saucy young woman”は、“coll. by 1700”となっている。OEDの用例の分布にほぼ一致すると言える。⁶⁴

2.6 ‘Harlot,’ ‘Harlotry’

上記のPartridgeによる17, 18世紀の定義にも出ているように、‘harlot’は前述の‘baggage’と同類の語で、‘prostitute’のことである。方言辞典のEDDや俗語辞典の*DSUE*には収録されていないので、特に地域的・社会的要因には拠らない一般語であるが、その語源が多岐に渡る上に、意味的変遷の面から重要と思われるので、ここで扱っておきたい。語源に関して、例えば、Johnsonは、Welshで‘girl’を意味する‘herlodes’や、‘a little whore’を意味する‘horelet’に加え、“Others from the name of the mother of William the Conqueror”とか、“Hurlet is used in Chaucer for a low male drudge.”などを挙げている。⁶⁵ 征服王Williamの母親の名については、Mills (1989: 114-15) が“so strong was the negative female association that a folk-etymology emerged which derived the word from *Arlette*, mother of William the Conqueror, previously known as William the Bastard.”と解説している。

上述のJohnsonにも記載されている通り、Chaucerの用いた‘harlot’は、女性ではなく男性を指していた。この‘harlot’については、OEDにも“As a word of masculine gender found early in 13th c., as feminine in 15th c.; a. OF. *herlot, harlot, arlot* masc., lad, young fellow, base fellow, knave, vagabond”と出ており、元々男性を対象とする語であったことが分かる。ME期には‘vagabond,’ ‘buffoon,’ ‘a male servant or attendant’の意味から、単なる‘fellow’に至るまで、もっぱら男性に向けられる語であった模様である。それが、15世紀頃から女性のことを指すようになり、特に“An unchaste woman; a prostitute; a strumpet.”という悪い含みを持つ意味合いでは、“Very frequent in 16th c. Bible versions, where Wyclif had *hoore, whore*; prob. as a less offensive

word.”であった。⁶⁶ Mills (1989: 17) は、この語に関して、“*Harlot* is rarely used in the C20th except archaically and it perhaps still has connotations of ‘rascal,’ which make it less opprobrious than either *whore* or *prostitute*.”と述べており、現代英語では古語の扱いになっている。

以下には、*Pam*からの例を挙げておく。*Pam*の中では、Mr. Bの正式な妻となったPamelaに対し、夫の姉であるLady Daversが⁶⁷（不釣り合いな結婚への非難から）口汚く罵倒する場面で用いられている。

(17a) Dost thou know if that young Harlot is to lie with my Brother To-night? (*Pam* II. 242)

(17b) It is, to pamper up thee, thou Harlot, that we attempt to withdraw from others what we do not want, or to with-hold from them what they do.

(JA 61)

また、*Pam*には、以下の(18)の例のように、この‘harlot’に接尾辞の‘-ry’が付加された‘harlotry’も、人を表す名詞として現れる。この語は、接尾辞の‘-ry’が示すように、元々「行為」や「性質」を表し、“Buffoonery, jesting; ribaldry, scurrility, scurrilous talk; obscene talk or behaviour. *Obs.*” (初例: c1325) という意味であった。それが、“Profligacy or vice in sexual relations, unchastity; the conduct of a harlot; dealing with harlots; the practice or trade of prostitution.” (初例: 1377) という意味を経て、具体的に人を表す“A harlot; a term of opprobrium for a woman.” (初例: 1584) へと拡張している。*OED*に“In 1821 *collective.*”という注釈が付いているように、19世紀には「ふしだらな女ども：売春婦たち」というように、集合的に用いられるようになった。⁶⁸ *JA*や*Sham*には一度も使用されていないが、Richardsonの他の作品である*Sir Charles Grandison*からの例が、*OED*の用例となっている。

(18) And where lies the young Harlotry? continued she. (*Pam* II. 242)

2.7 ‘Strumpet’

‘strumpet’も“A debauched or unchaste woman, a harlot, prostitute.” (初例: 1327) という意味で、上述の‘harlot’や‘harlotry’と同類の語である。⁶⁸ この語の由来について、*Johnson*には“Of doubtful origin”となっており、⁶⁹ *OED*にも“Of obscure origin”であるので、語源が不明である。*Pam*からの例を、

以下に挙げておく。

(19) If I bear this, said she, I can bear any thing!--
O the little Strumpet!-- (*Pam* II. 250)

これまで扱った多くの女性を表す語と違い、‘strumpet’は大幅な意味の変遷を受けず、本来の意味をそのまま保っている。但し、Mills (1989: 230) が“The word has been the source of several other words and expressions (now mostly obsolete)”と指摘し、“to strump it: to play strumpet,” “strumpetry: harlotry,” “strumpeteer: whoremonger,”⁷⁰ “strumpetocracy: a jocular term for the notion of rule or government by strumpets”などの例を挙げているように、数々の造語を生み出す基にはなったようである。

終わりに

さて、以上のように18世紀の代表的小説であるRichardsonの*Pamela*と、そのパロディであるFieldingの*Shamela*, *Joseph Andrews*を資料に、人を表す言葉、とりわけ悪態の呼称について歴史的観点から吟味・考察をしてきた。序論の中でも触れたが、Fieldingは、オリジナルであるRichardsonの特徴をよく掴み、*Shamela*においては、それらの特徴を滑稽なまでに誇張して模倣している。さらに、Richardsonが使用していない卑俗な言い回しを所々に散りばめ、オリジナルの模倣でありながらも、両者の文体のレベルには大きな開きがあり、パロディならではの風刺の矢が鋭く放たれている。

また、Fieldingの作品には、方言や俗語の面から見ても貴重な例がいくつか見出された。英国の方言辞典である*EDD*を丹念に調べていくと、1.6の‘put’の例のように、Englandの地方方言、特にDevonshireの方言が、アメリカ方言と共通していることに気付く。かつて、この海沿いの南部の地から、かなり多くの移民が、新天地を求めてアメリカに渡ったのではないかと偲ばれる。

さらに、女性を対象とする悪態語を歴史的に概観していくと、変遷の過程において、しばしば「意味の悪化」(pejoration)を受けてきたことが辿れる。また、現在女性を表すものとして通用している語の中には、OEやMEの時代には、性別に関係なく使用されていたものが多々あったということや、好ましくない意味が女性のみを指すようになったということも辿っていった。これまでの考察事項から、英語には、特に‘prostitute’を表す語彙が豊かで、日本語に比べて多種多様であることが分かった。この

点について、Mills (1992: 115) が、“The English language contains many different words for a prostitute and the dictionaries all tend to treat them as synonyms: thus a whore is defined as a harlot or a prostitute, a prostitute is defined as a whore or a harlot, and so on. But there are shades of difference in all of these terms which are sometimes difficult to discern.”と述べているように、各語のニュアンスを掴むためには、単に同意語として処理するのではなく、一語一語を歴史的に明らかにするのはもとより、場面・状況や社会的要因などを考慮に入れて分析をすることが望まれる。

スペースの関係上今回の論考からは割愛したが、‘wretch,’ ‘rogue,’ ‘brute,’ ‘beast,’ ‘villain,’ ‘rake,’ ‘rascal’などの悪態語、女性固有のものでは、‘sow,’ ‘minx,’ ‘jade,’ ‘bitch,’ ‘vixen,’ ‘wench’など、さらには、‘Lucifer,’ ‘Scratch,’ ‘Jezebel’のような象徴的な喩えなど、英語における悪態語は（そして、その逆の親愛語も）枚挙にいとまがない。これらの表現について、小説だけでなく、口語の特徴が顕著に現れている当時の劇作を資料に、今後さらなる調査・研究を進めていきたい。

注：

1. 以下、下線部は全て筆者による。また、各引用文の出典は、**TEXTS**の項を参照。
2. 本文に直接示してしている以外の略語は、以下の通りである。

a: ante, ‘before,’ ‘not later than’ / *a., adj.:* adjective / Amer.: America, American / A.V.: Authorized Version / *c:* circa, ‘about’ / *c.:* century / *ca.:* about (the year . . .) / *coll., colloq.:* colloquial, -ly, -ism / *comb.:* combinations / *comp.:* compound / Dev.: Devonshire / *dial.:* dialect, -al(ly) / *Eng.:* England, English / *Ex:* from, derived from / *fig.:* figurative, -ly / *Fr.:* French / *gen.:* general, -ly / *Gr.:* Greek / *Hist.:* History, -ical / *Isa.:* Isaiah / *midl.:* midland (dialect) / *mod.Icel.:* Modern Icelandic / *LG:* Low German / *MSw.:* Middle Swedish / *n.:* noun / *north.:* northern (dialect) / *obs.:* obsolete / *Perh.:* Perhaps / *pl.:* plural / *ppl. a.:* participial adjective / *prec.:* preceding / *repr.:* representative, representing / *sb.:* substantive / *Sc.:* Scotland / *spec.:* specifically / *Suf.:* Suffolk / *transf.:* transferred sense / *var.:* variant of // †: obsolete

Kingd. & Commw.: *The worlde, or an historicall description of the most famous kingdomes and*

commonweales therein tr. I. R.

Phraseol. Gen.: *Phraseologia generalis; a full large and general phrase book.*

3. *OED, s.v. ‘boldface,’* 1.
4. *OED, s.v. ‘bold-faced,’ ppl. a.* 1.
5. *OED, s.v. ‘fat,’ a. Comb.* 14. Special comb.
6. *OED, s.v. ‘baby,’ n. B. Comb.* 2. Special combinations.
7. *OED, s.v. ‘dirt,’ n.* 2.d.
8. *OED, s.v. ‘saucebox.’* *n.*
9. *Johnson, s.v. ‘SAUCEBOX,’* *n.*
10. *EDD, s.v. ‘SAUCE,’ sb. and v.* 8. *Comp. (I)* Saucebox.
11. *OED, s.v. ‘sauce,’* *n.* 6.a.
12. *OED, s.v. ‘saucy,’* *a.*¹ 5. Comb.
13. *OED, s.v. ‘chop,’* *n.*² 1.b. & 2.
14. *DSUE, s.v. ‘chops.’*
15. *OED, s.v. ‘chop,’* *n.*² 2.
16. *Johnson, s.v. ‘CHOPS,’* *n.* 2.
(*Johnson*には、“without a singular”として‘chops’が見出し語となっており、この形を“corrupted probably from CHAPS”としている。)
17. *OED, s.v. ‘chop,’* *n.*² 3.
18. *EDD, s.v. ‘CHOP,’* *sb.*¹ [In *gen. dial. or slang use in Eng.*] 1. [In *pl.*].
19. *OED, s.v. ‘cheek,’* *n.* 1.a., 1.b. & 4.a.
20. *OED, s.v. ‘cheeky,’* *a.*
21. *OED, s.v. ‘brat,’* *n.*²
22. *Johnson, s.v. ‘BRAT,’* *n.*
23. *OED, s.v. ‘brat,’* *n.*¹ 1.b.: “in *midl., west., and north. dial.,* A child’s pinafore,” *c.:* “contemptuously. A rag,” & †3.
24. *EDD, s.v. ‘BRAT,’* *sb.*²
25. *OED, s.v. ‘brat,’* *n.*²
26. *OED, s.v. ‘child,’* *n.* 3.b.
27. *OED, s.v. ‘impleton,’* *n.* 1.
28. *EDD, s.v. ‘IDLETON,’* *sb. ?obs.* “An idle Fellow.”
29. *Johnson, s.v. ‘SIMPLETON,’* *n.*
cf. *OED:* “One who is deficient in sense or intelligence; a silly or foolish person; a fool.”
30. *EDD, s.v. ‘SIMPLETON,’* *sb. obs.* [Dev.]
31. *OED, s.v. ‘put,’* *n.*⁴
32. *Johnson, s.v. ‘PUT,’* *n.* 2.
33. *EDD, s.v. ‘PUT(T,’* *sb.*³ [Suf. Dev. Slang. and Amer.] 1.
34. *DSUE, s.v. ‘put.’*
35. *OED, s.v. ‘hussy, huzzy.’* *n.*

36. *Johnson*, s.v. 'HUSSY,' n. (初例: a1340)
37. cf. *EDD*, 'HUSS(E)Y,' sb. ('hussy' の異形の 'huzzif' は, Durham, Westmoreland, West Riding of Yorkshire, Lancashire, South Cheshire, North West Derby など, 'hussif' は, Lakeland, West Yorkshire などイングランド北西部を中心に残った模様である。)
38. *OED*, s.v. 'hussy, huzzy,' n. 1. & 2.
39. *Johnson*, s.v. 'HUSSY,' n.
40. *EDD*, s.v. 'HUSS(E)Y,' sb. 1. & 3.
41. *OED*, s.v. 'hussy, huzzy,' n. 3.
42. *DSUE*, s.v. 'hussy, huzzy.'
43. *Johnson*, s.v. 'SLUT,' n.
44. *OED*, s.v. 'slut,' n. 1.a., 2.a. & b.
45. *OED*, s.v. 'drab,' n.¹ 1. & 2.
46. *Johnson*, s.v. 'DRAB,' n.
47. *DSUE*, s.v. 'drab.'
48. *OED*, s.v. 'drab,' n.² and a. B. *adj.* 1.a., b. & C. n. 1.c.
49. *OED*, s.v. 'dowd,' n.¹
50. *OED*, s.v. 'dowdy,' n.¹ A. n.
51. *EDD*, s.v. 'DOWDY,' sb. and *adj.* [In gen, dial. and colloq. use in Sc. and Eng.] 1. sb. & 2.
52. *Johnson*, s.v. 'DOWDY,' n.
53. *OED*, s.v. 'trollop,' 1.
54. *Johnson*, s.v. 'TROLLOP,' n.
55. *EDD*, s.v. 'TROLLOPS,' sb. and v. [Var. dial. and colloq. uses in Sc. and Eng.] 1. sb.
56. *DSUE*, s.v. 'trollop.'
57. *OED*, s.v. 'baggage,' A. n. 1.a.
58. *Johnson*, s.v. 'BAGGAGE,' n.
59. *OED*, s.v. 'baggage,' n. 6. & 7.
60. *EDD*, s.v. 'BAGGAGE,' sb. ³ 1.
61. *Johnson*, s.v. 'BGGAGE,' n. 3.
62. 当時 'punk' は, 多くの場合, 'prostitute' を意味していた。
63. *OED*, s.v. 'baggage,' n. 3., 4.a., b., c., d., e., f. & 5.
64. *DSUE*, s.v. 'baggage.'
65. *Johnson*, s.v. 'HARLOT,' n.
66. *OED*, s.v. 'harlot,' n. 1. 2. 3., 4. 5.a., b. & c. 詳細は以下の通りである。
1. A vagabond, beggar, rogue, rascal, villain, low fellow, knave. In later use (16-17th c.), sometimes a man of loose life, a fornicator; also, often, a mere term of opprobrium or insult. *Obs.*
(初例: a1225)
2. An itinerant jester, buffoon, or juggler; one who tells or does something to raise a laugh. *Obs.*

3. Applied to a male servant or attendant; a menial: cf. knave, in similar use. *Obs.*
(初例: a13--)
4. = 'Fellow'; playfully 'good fellow'. *Obs.*
(初例: c1386)
5. Applied to a woman.
- a. As a general term of execration. (Cf. 1.) *rare.*
(初例: c1485)
- b. A female juggler, dancing-girl, ballet-dancer, or actress. (Cf. 2.) *Obs.*
(初例: 1483)
- c. *spec.* An unchaste woman; a prostitute; a strumpet.
(初例: 1432-50)
67. *OED*, s.v. 'harlotry,' n. 1., 3. & 4.
68. *OED*, s.v. 'strumpet,' n.
69. *Johnson*, s.v. 'STRUMPET,' n.
70. *OED* では 'strumpetier' という綴り字である。

TEXTS

- Fielding, H. (1742) *The History of Adventures of Joseph Andrews and of his Friend Mr. Abraham Adams*, D. Brooks-Davies (ed.), Oxford: Oxford University Press, 1988.
- (1741) *An Apology for the Life of Mrs. Shamela Andrews*, D. Brooks-Davies (ed.), Oxford: Oxford University Press, 1988.
- Richardson, S. (1740) *Pamela; or, Virtue Rewarded*, The Shakespeare Head Edition of the Novels of Samuel Richardson, Vol. I. & Vol. II. Oxford: Basil Blackwell, 1929.

REFERENCES

- Crystal, D. (1988) *The English Language: A guided tour of the language by the presenter of BBC Radio 4's English Now*, Penguin Books, London.
- Green, J. (1997) *Slang through the Ages*. NTC Publishing Group, Lincolnwood.
- Görlach, M. (2001) *Eighteenth-Century English*. Universitätsverlag C. Winter, Heidelberg.
- Johnson, S. (1755) *A Dictionary of the English Language*. Georg Olms Verlagsbuchhandlung (rpt. 1968), London & Hildesheim.
- 小西友七他編. ([1973] 1994²) 『ランダムハウス英和大辞典』, 小学館, 東京.
- 小西友七・南出康世編. (2001) 『ジーニアス英和大辞典』, 大修館, 東京.
- 松田徳一郎他編. ([1984] 1999²) 『リーダーズ英和辞典』, 研究社, 東京.

Mills, J. (1989) *Womanwords: A Dictionary of Words About Women*, Free Press (A Division of Macmillan, Inc.), New York.

中島文雄編. (1970) 『岩波英和大辞典』, 岩波書店, 東京.

Partridge, E. ([1937] 1961⁵) *A Dictionary of Slang and Unconventional English*. Routledge & Kegan Paul Ltd (rpt. 1974), London.

Simpson, J. A. & E. S. C. Weiner, eds. ([1884-1928] 1989³) *The Oxford English Dictionary*. Clarendon Press, Oxford. 及び *OED Online*.

竹林 滋他編. ([1927] 20026) 『研究社 新英和大辞典』, 研究社, 東京.

Wright, J. ed. (1898-1905) *The English Dialect Dictionary*. 6 vols. Oxford University Press, London.